夕焼け通信 1332号　2021.11.29
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）78

木幡智恵美

義母の病気（2）

「木幡さん」と呼ばれ、診察室に入った。泌尿器科の先生の前に、車椅子の義母、そして両側に夫と私が並ぶ。先生は、約一時間に及ぶ検査の労をねぎらい、まずは血液検査と尿検査の結果について、プリントアウトされた紙を示しながら説明された。貧血があることと腎機能がよくないこと。これは、一年半前にインフルエンザによる肺炎で入院した際も、当時の主治医から聞かされていて、万が一のこともありうると言われていた。あれからまた歳を重ねたので少し数値が落ちてきているようだ。

次に、パソコンに写されたCT画像を示される。「上の方から見ていきましょう。まずは心臓ですね」と、心臓の内部に白く映る部分を指す。「周りに水が溜まっています」肺の画像にも同じように白いが所があった。脚だけじゃなく、内臓にまで水が溜まっているのか。大動脈には三センチくらいの瘤があるとのこと。ここまで聞いて、納得した。「目がへん」「息苦しい」「熱がある」と度々呼ばれ、その度に、体温計や血圧計を持って行って、熱や血圧を測った。平熱だし、血圧も正常範囲内のことが多く、「大丈夫ですよ」と言っていたが、大丈夫ではなかったのだ。こんな身体で心持が良い訳がない。「生きることは大変です」も口癖で、「はあ、もういいわ。嫌んなった」「早くお迎えが来んだらか」などと言うこともあった。そのうえ歩くこともできなくなり、気持ちがどんどん落ち込んでいったことだろう。ドンドンと訴えることしかできなかったのだ。不機嫌になって当然。「与えられた命だから」と自分に言い聞かせるようにもしていた。どうにもならない身体を、どうにもできずにいる苦しさ。義母は一人置かれた部屋の空間でもがき続けていたのだ。

身体全体の状況が、詳しい説明で良く分かった。「いろいろ問題がありますが、今すぐどうということはないです。そして、肝心なところ、痛みがきた膀胱です」いよいよ問題の箇所に焦点を当てる。「ここに腫瘍があって、壁のこの部分の神経を圧迫しています。それで痛むのです。木幡さん、痛かったですねえ」と、義母に声を掛けることも忘れない。この先生に任せたら安心だ。この時点で、肩の荷がどさっと落ちてきた気がした。

がらがら橋日記

宮森健次

自転車6　立杭(1)

丹波焼の窯元巡りは、篠山の観光を兼ねてできるものと思っていたら、立杭といって市の西端にあることがわかった。とんだリサーチ不足だった。篠山の旅館を出るとき、若女将に、

「自転車で行けますかね、窯元に。」

と聞いたら、ニヤニヤして、

「あっ、朝出られるとき見ましたよ。かっこいい自転車で。行けるんじゃないですか。けっこうアップダウンありますけどね、チャレンジ、チャレンジ。」

嫌な予感がしたので、車で行くことにした。正解だった。丹波焼というから丹波篠山と近接しているイメージを持ってしまうのだが、武家屋敷にいた女性によれば、立杭焼と言った方がなじみがあるのだそうで、陶工たちの里と言えば丹波篠山にあらず、立杭なのだった。

立杭に着いてみると、陶芸まつりと染められた幟が国道沿いに延々とはためいていて、思ったよりずっと大きなところだった。国道の両側に五十軒あまりの窯元や関連施設が点在し、それぞれに作陶、展示、販売をしているのだから、一軒一軒見て回ったりなぞすれば、どれほど時間がかかったものかわからない。そんな者たちのために、各窯元の作品を一堂に集めた施設があるのだが、あいにくと定休日だった。そこで品定めをしていざ購入せん、と思っていた当てが外れた。やむを得ず勘で入ったある窯元で不平を言うと、

「私たちも言ってるんですよ。陶芸まつりの期間中くらい開けたらってね。」

と窯元の娘さんが私への同情を込めつつ、笑いながら言った。内輪の不平を正直に言ってくれたのに力を得て、ついでに言ってみる。

「ここに行ったがいいよ、という窯元、こっそり教えてもらえませんか。言いにくいとは思うが…。」

そうですねえ、としばらく悩んではみせたものの、それほど抵抗も感じないようで、地図を指さし、名前を挙げていく。

「あっ、ここのもかわいいし、ここは、親戚なんです。ここもデザインがいいし、ここも人気だなあ。それからここも親戚です…。」

いくらでも挙げてくれるので、目的を達したのだかどうだかわからなくなったが、次の客が入ってきたのをきっかけに切り上げた。礼にスープカップを二つ、ささっと選んで購入した。まつりの期間中はじゃんけんに勝ったら二割引です、と言われるままにしたら負けた。心構えのない者に対する勝ち方を心得ているようだった。

最初に名前の挙がった窯元めざし自転車を駆った。

30代フリーター　やあ、ジイさん。公文書を改竄され、公権力を私物化され、賄賂を疑われそうな金のやり取りをされて頭に来ていても、投票になると自民党に入れてしまう。そんな衆院選の結果を見ると、日本国民はよほど自民党が好きなんだと思えてくる。

年金生活者　そのメンタリティーは、できの悪い子ほど可愛いという、親の愛に似ている。自民党は不肖の子で、国民はその親にたとえることができる。子はけんかをしたり、わがままを言ったりを繰り返す。親はそれに手を焼きながら、やっぱり可愛いと思わずにいられない。あるいは自民党を放蕩をやめない親に、国民をその子にたとえてもいい。子は怒りながらも、仕事をして自分たちを育ててくれた親を見離すことができない。

　そんな繰り返しが破られたのが２００９年の政権交代だ。親は「勘当だ」と言って子を家から追い出した。あるいは子が親に「もう一緒にいられない」と言って家を飛び出した。

　追い出した子の代わりに迎えた養子はしっかり者に見えたが、一緒に暮らし始めると、勇ましいのは口だけで実は頼りないことが露見した。あるいは、実の親の代わりになってくれた養親は立派に見えたが、約束を破り、果ては子をそっちのけで夫婦げんかを始めた。離れていた実の親子は「やっぱりもとのほうがいい」と復縁した。

30代　日本の社会全体が政治と家族をごっちゃにしたような公私混同をやっているように見える。安倍政権下で起きた政治スキャンダルのほとんどが公私混同の範疇に入るものであることもうなずける。

年金　だが、資本主義のグローバル化と高度化は公私の分離を進める方向に作用しているように見える。政治の場面でその兆候を示しているのが、政党と有権者の関係をドライな契約関係のようにみなす選挙を展開して大阪で自民党を圧倒し、衆院選で議席を伸ばした日本維新の会だ。

30代　自民党にお灸をすえる、とよく言われる。これも政治に親子関係を持ち込んだような言い方だが、今回の衆院選はそのお灸の煙すら見えなかった。

年金　自民党は小選挙区では接戦の末に勝った候補者が多くて肝を冷やしたはずだから、それ自体がお灸になっていると言える。

　お灸の最大の理由は、長期にわたる経済の停滞だ。この20年間、実質賃金は先進国の大部分で上がっているのに、日本はほとんど上がっていない。この停滞が将来への不安を呼んでいる。それはいくら給付金をバラまいても消えることはなく、財源の裏づけのないバラマキはむしろ不安を増幅させている。将来への不安を取り除くためにも、再分配の財源を確保するためにも、経済成長が不可欠なのに、アベノミクスはそれを果たせず、現政権も確たるビジョンを示していない。

　いま自民党は議席数こそ他党を圧倒しているものの、次の選挙でも継続が予想される野党の候補者一本化と、上り調子の維新の勢いによって、いつそれをひっくり返されるかわからない不安を抱えているはずだ。国会はそうした目には見えない緊張をはらんでおり、それが国民の望んだことでもあると考えることができる。

30代　それならもう少し野党が伸びていいはずだ。

年金　今の日本国民が政治で最も嫌うことのひとつが上から目線だ。自分たちを見下す政党や政権を受け付けない。どの政党もそれをよくわかってはいるが、思い通りにいかないこともある。とりわけその党の体質が作用している場合はそうだ。野党第1党と第2党を見ていると、それを感じる。

　立憲民主党の体質をひと言で言えば「知識人主導」の集団だということだ。知識を蓄えた者はそうでない者に対して上から目線になりやすい。知識を獲得することは世界を俯瞰する高い足場を得ることだからだ。

　自分たちは進んでいて一般国民は遅れている、と意識的には考えていないとしても、無意識のうちにそう感じてしまう危険がつきまとっている。衆院選で議席を減らしたのは国民がわれわれの訴えを理解する力を欠いていたからだ、といった具合に。それはあからさまには出てこないが、選挙の総括や代表選などを通じて国民に伝わる可能性がある。

　立憲民主党結成に際して枝野幸男の訴えた「右か左かなんていうイデオロギーの時代じゃないんです。上からか、草の根からか。これが21世紀の本当の対立軸なんです」という主張がいま党の倉庫にしまい込まれているように感じられる。

　一方、勢いづいている日本維新の会は「行動者主導」の政党と言うことができる。この党の母体にあたる大阪維新の会は、敗れはしたものの大阪都構想の住民投票に2回もこぎつけたし、他党がバリケードを張って抵抗する中で大阪府議会の定数削減を実行するなど、その行動力を見せつけた。

　それが有権者を引きつける力になっている一方で、住民投票での2連敗が示すように反発も根強い。行動力ゆえのおごりが、こわもてあるいは強引さとなってあらわれていると推察される。党勢が上向きの今はそれもある程度帳消しになるが、強気になり過ぎたとき、足もとをすくわれて転んでしまうもろさをはらんでいるように見える。

ニュース日記　810

中村　礼治

日本国民の「自民党愛」